

# 若 槻 池

発掘調査報告書



1987.3

大和郡山市教育委員会

## 序 文

若槻庄は、日本の荘園研究史上きわめて重要な位置を占めております。地元の視学・喜多芳之氏の周到な史料飄渉と、渡辺澄夫氏の精緻な分析によって環壕集落の形成過程が実証的に解明され、学界のみならず広般に周知された荘園であります。

今回、この著名な荘園の地に子供科学博物館の建設を計画したため発掘調査を実施いたしました。建設用地である若槻池は、荘の水田をうるおす水源であり、環壕集落の生活を維持してきたものであります。池の埋立ては心苦しいものであります。やがて完成する博物館が子供達の一つの心の量になることによって、古く鎌倉時代から荘民の生活を支えてきた若槻池の役割りを現代に蘇えら抽なものであります。今後の若槻庄研究の一助になれば望外の幸であります。

なお、最後になりましたが、調査に際して地元若槻町の住民の方々をはじめ、多くの方の御理解、御協力を得ましたことを深く感謝する次第であります。

昭和62年3月31日

大和郡山市教育委員会

教育長 堀 口 喬 三

## 例 言

- 1 本書は、大和郡山市が計画する仮称「童の館（子供科学博物館）」建設工事に伴い大和郡山市若槻町4番地において実施した若槻池の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大和郡山市教育委員会(教育長 堀口義三)が調査主体となり実施し、現地は同技師服部伊久男が担当した。
- 3 調査期間は、昭和61年5月8日から同5月31日までであり、のべ24日間を費した。
- 4 調査に際しては、下記の方々の御協力、御指導を得た。記して感謝したい。(敬称略)  
若槻町(自治会長 村岡武彦)  
平和土地改良区(理事長 木村清)  
(現地作業員) 奥村利一・中山実・大橋一夫・森田保・大西重信・今田守彦・奥田正治・今西苑之松・

なお、中井一夫氏(奈良県立橿原考古学研究所)からは数々の有益な御教示をいただいた。

- 5 本書の執筆・編集は服部が担当した。

## 本文目次

I 調査の契機と経過	1
①はじめに	1
②調査日誌抄	1
II 位置と環境	2
III 調査	7
①遺跡の概要	7
②遺構と遺物	9
IV 総括	14

## 挿図目次

図1 若槻池位置図Ⅰ	目次裏
図2 若槻池位置図Ⅱ	3
図3 下ッ道及び若槻庄関連調査地点	4
図4 若槻庄小字名分布図	6
図5 堤体の各部名称	8
図6 トレンチ配置図(折込み)	8~9

図7	第Vトレンチ出土遺物実測図	9
図8	第I・II・III・IVトレンチ土層断面図	11
図9	第V・VI・VIIトレンチ土層断面図	12
図10	堤体の形状変化模式図	14
図11	西堤体トレンチ地山面比較図	15
図12	東堤体トレンチ地山面比較図	15
図13	堤体の崩壊要因	17

### 表目次

表1	若槻庄関連遺跡調査一覧
----	-------------

### 写真目次

写真1	調査風景
-----	------

### 図版目次

図版1	(a)池床部全景(南西から) (b)池床部細景(南から)
図版2	(a)西側堤体部全景(南から) (b)東側堤体部全景(南から)
図版3	(a)調査風景 (b)第Iトレンチ全景(北から)
図版4	(a)第Iトレンチ土層堆積状況(南東から) (b)第Iトレンチ(北から) (c)第Iトレンチ(南東から)
図版5	(a)第IIトレンチ(西から) (b)第IIIトレンチ(西から) (c)第IVトレンチ(南から) (d)第Vトレンチ(東から) (e)第VIトレンチ(南東から) (f)第VIIトレンチ(南から)
図版6	若槻池航空写真(真上から)
図版7	若槻環濠集落の現状航空写真(真上から)
図版8	番条環濠集落の現状航空写真(真上から)
図版9	稗田環濠集落の現状航空写真(真上から)

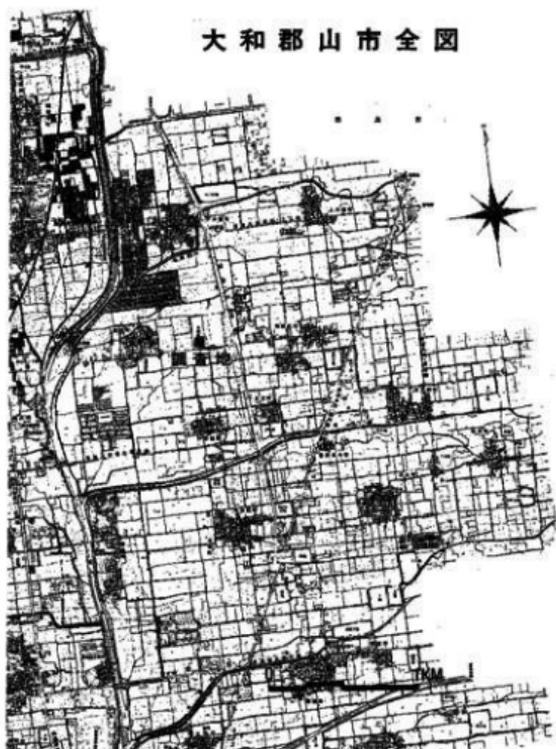


図1. 若槻池位置図I  
1973年測図、1980年経年変化修正  
1:25,000「大和郡山市全図」使用

## I 調査の契機と経過

### ① はじめに

大和郡山市では青少年の健全育成事業の一つとして仮称「童の館」（子供科学博物館）の建設を計画している。来るべき21世紀に備え、次代を担う若者に科学する心を育てることを目的としているが、田園文化都市を標榜する当市の性格や、建設地である若槻町・稗田町の歴史的経過を加味した上で、科学技術を人間の生活の知恵の総体としてわかり易く把えることを目指し、そこに歴史博物館的な要素をも盛り込んだ斬新な企画である。そして、この用地が大和の皿池の中でも代表的な“若槻池”に求められたのであった。当該池は、中世の荘園研究史上著名な若槻庄の用水源であり、若槻庄の成立・発展を考える上で重要であるばかりか、大和の皿池の歴史を知る上でも重要な遺跡であった。

建設工事は、現若槻池の南半部約10,000㎡を埋め立てて行うものであり、大規模な開発行為にも該当することから当然のことながら事前調査が必要とされた。市教委では一定の内部調整を行うとともに、昭和61年2月20日付で県教育委員会・文化庁に対し埋蔵文化財発掘届出書（文化財保護法第57条3項に依る）を提出し事前の法定手続きに遺漏なく対処した。他方、地元自治会・土地改良区などの団体を通じて周辺住民の協力を仰ぎつつ、調査日程・調査期間等の具体的事項の調整を行うに至った。結果的には、昭和61年5月8日から同5月31日の間、実働17日間を費して発掘を実施することができた。

今回の調査の場合、本来ならば池床部全体を調査対象とすべきであったが、奈良県立権原考古学研究所が従前から実施している“若槻庄関連調査”と連動すべく、初期荘園成立時の池築造に係わる諸点の解明、すなわち、①若槻池成立時期の確定、②若槻池築堤技術の把握、等を調査の主眼に置くこととした。このため、池床部の調査は避け、主として池堤部の重点的調査を実施したわけである。

調査の契機と経過については、以上概観した通りであるが、次に調査日誌を抄録するので、調査の具体的工程については、以下を参照していただきたい。

### ② 調査日誌(抄)

昭和61年5月8日(木) 晴

本日より調査開始、整理室より器材を搬入する。第Ⅰトレンチを設定し、手掘りで下げる。硬い黄色粘土層に達する。いわゆる“綱土”である。

5月9日(金) 晴

第Ⅰトレンチに続き、新たに第Ⅱ・Ⅲトレンチを設定し、併行して掘り下げを行う。

5月13日(火) 快晴

第Ⅰ～Ⅲトレンチの掘り下げ順調に進む。

第Ⅰトレンチの写真撮影を行う。

5月17日(土) 晴

第Ⅱトレンチ掘り下げ、及び壁面精査。第Ⅲトレンチの写真撮影を行う。

5月19日(月) くもり後雨

第Ⅰ・Ⅱトレンチの断面実測を行う。橿原考古学研究所中井一夫氏来跡。

5月21日(水) 晴

第Ⅰトレンチの壁面実測を行う。地山粘土層と盛土層との区別がつけにくい。後、第Ⅰ～Ⅳトレンチの埋戻し。

5月22日(木) 晴

本日より東堤体の調査に移る。第Ⅴ・Ⅵトレンチを設定する。

5月23日(金) 晴

第Ⅴトレンチの黄灰粘土層(鋼土)より待望の瓦器碗片が出土する。

5月24日(土) 晴

第Ⅵトレンチの断面実測、第Ⅶトレンチを設定する。

5月27日(火) 快晴

第Ⅶトレンチ黄灰粘土層より瓦器碗片が出土。第Ⅴ～Ⅶトレンチの平板測量( $S=1/20$ )を行う。

5月31日(土)

第Ⅷトレンチの写真撮影及び断面実測、及び埋戻し。後、器材を搬出し作業を終了する。



写真1 調査風景

## Ⅱ 位置と環境

若槻池は、大和郡山市若槻町4-1・2番地に当る。この大字若槻町一帯は、最近になって大規模な宅地造成が行われ、また、その東辺に国道24号バイパスが開通するなどして様相が一変しつつあ

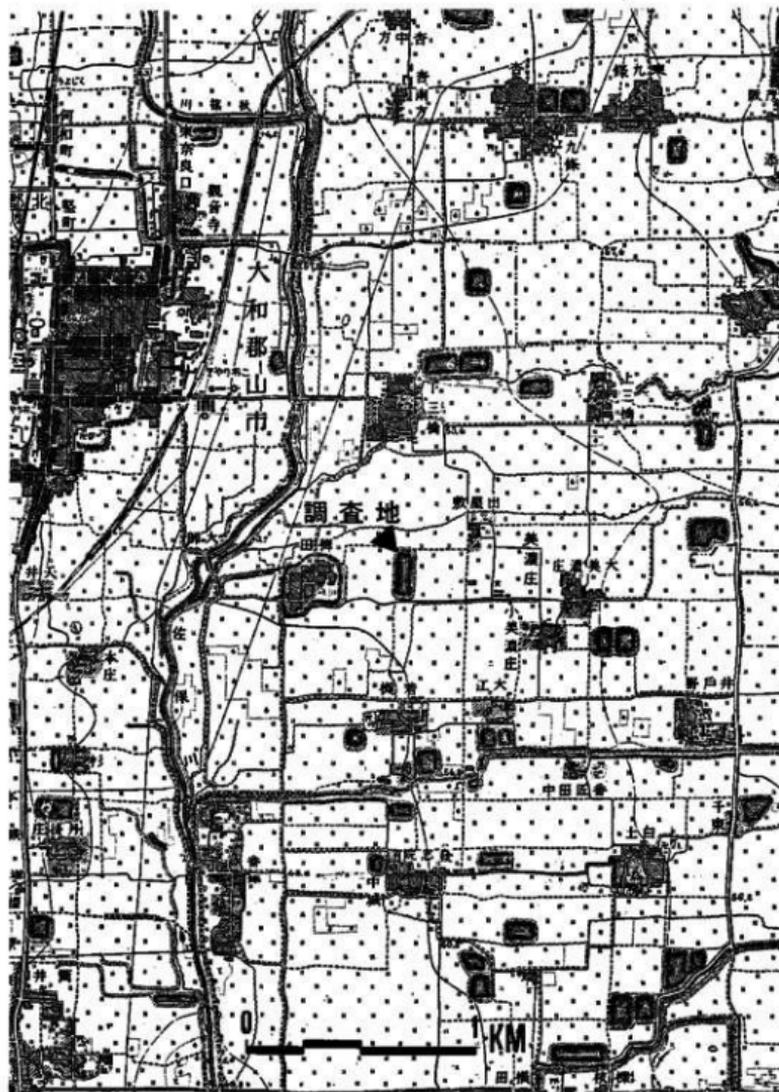


図2 若槻池位置図Ⅱ  
 (地理調査所1922年測図・1955年資料修正・2万5千分の1地形図「郡山」使用)

る。かつて渡辺澄夫をして「冷棟された現代の庄園」と言わしめた若槻庄も急速に都市化の波をかぶり、荘園景観の喪失は著しい。もともとこの辺りは郡山市の中でも水田景観を多く残す農村地帯であったが、昭和52年の県道大和郡山広陵線（蘭町線）の開通、それに続く昭和53年の国道24号バイパスの開通という2本の幹線道路に挟撃されることによって交通利便性が発達し、文教施設（大

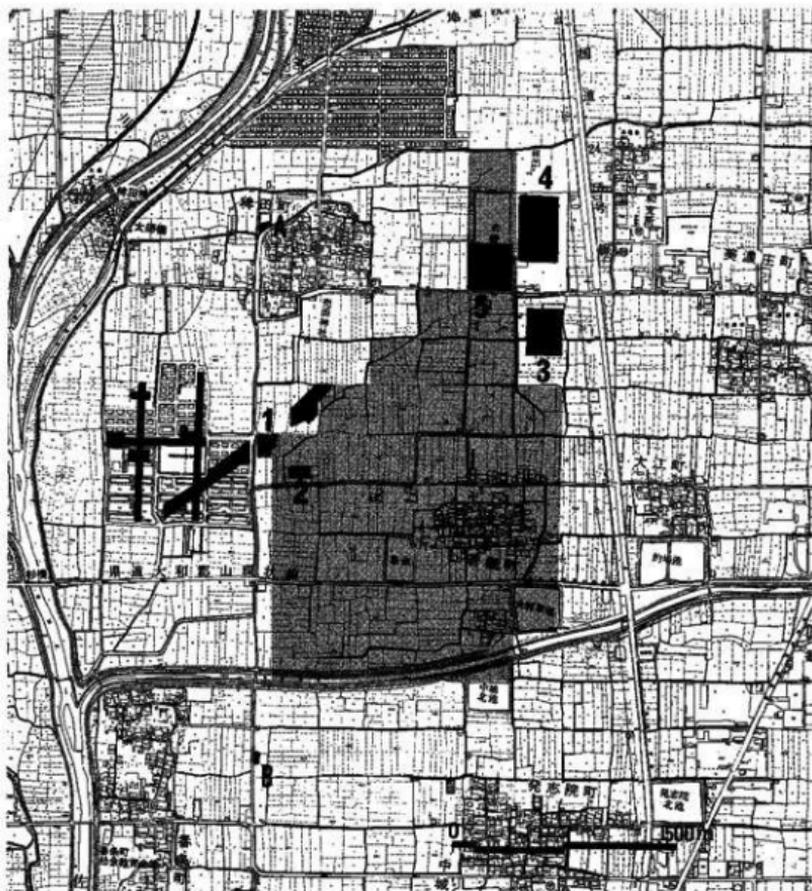


図3. 下ッ道及び若槻庄関連調査地点  
 1973年測図、1980年経年変化修正  
 1:10,000「大和郡山市全図」使用  
 (数字は、若槻庄関連調査次数を示す)

和郡山市立郡山東中学)や県営住宅(稗田団地)等の建設が相次ぎ、開発が進んできている。西側の佐保川、北側の地藏院川、南側に菩提仙川が流れる比較的穏やかな水田景観も変化が著しい(図1・2)。

次に現代的な様相とは別に歴史的な環境についてみてみたい(図3)。

若槻庄の西辺が古代の幹道下ッ道であったことはよく知られている。平城京羅城門から南進する下ッ道は、現在では佐保川とその位置が重複しているため判りにくいが、郡山市稗田町~天理市二階堂町に至る間は幅約30mの地割が残し、よくその痕跡をとどめている<sup>①</sup>。下ッ道の発掘調査は、この間で3次にわたり実施されている。稗田遺跡は、奈良時代の人工河川と下ッ道が交差する地点であり、橋梁が検出されている<sup>②</sup>。川跡からは、人形・人面墨書土器・土馬・斎串などの多くの祭祀遺物が出土し、平城京外の一つの祭場であったと考えられている。中城武ノ坪遺跡(図3-B)でも橋梁が検出されている。市道拡幅工事に際しての事前調査で偶然発見された遺跡である。幅約10mの自然河道が南西流し、河道内から和同開珎が出土している。菩提仙川の旧河道の可能性が高い。径約0.4mの主橋脚が2本、橋脚には厚さ約5cmの護岸板が添えられ、河道内には杭列が認められた。

稗田環濠の北辺・西辺部分の改修工事に伴い実施した事前調査(図3-A)では、下ッ道の東側溝を確認している<sup>④</sup>。幅約17mで検出され、土器・瓦埴類の他に漆塗碗等が出土している。また、県営住宅稗田団地の調査では、弥生時代中期の土坑、古墳時代後期の水田址などが検出されている<sup>⑤</sup>。

次に若槻庄城および関連地における調査を概観しておきたい。これまで奈良県立橿原考古学研究所によって4次にわたる調査が実施されている(図-3・表1)。

第1次は、稗田若槻遺跡の調査である。第2次調査では、溝・堀立建物・土坑・井戸等が検出されている<sup>⑦</sup>。井戸・溝から黒色土器が出土していることから平安時代初期頃の屋敷地と考えられている。調査地は、京南三条一里二坪で若槻庄に含まれる場所であり、徳治土銀では中田名の存在が知られている。荘園成立に先行する建物群の存在は注目される。第3次は、二条一里三一・三二坪に当り、荘域外ではあったが、重要な遺構が検出されている。幅約3m、深さ約1.5m、一辺約45mの環濠に囲まれる堀立建物4棟、井戸1基、池状遺構1基が検出され、また、環濠外でも井戸が多数検出されている<sup>⑧</sup>。環濠に囲まれた屋敷地は約2,500㎡の規模をもつものである。また、鉾津の出土から小銀治的な生産活動を行っていたと推考されている。

第4次は、若槻池の東側で実施されている。縄文晩期の自然河道、古墳時代前~中期の土坑、奈良時代の人工河川、中世家溝溝群が検出されている<sup>⑨</sup>。なお、第5次は、本書に報告する若槻池の調査である。

以上みてきたように、これまで若槻庄関連調査として実施された調査は、主として若槻庄の外周部で行われており、庄内で行われたのは第2・5次の2回に過ぎない。しかしながら、第3次調査で検出された11世紀から15世紀にかけて存在した環濠をもつ屋敷地のように、若槻庄と併存していた遺跡が発見されるなど新たな問題を提起している調査もあり、今後も庄城内は言うに及ばず、近

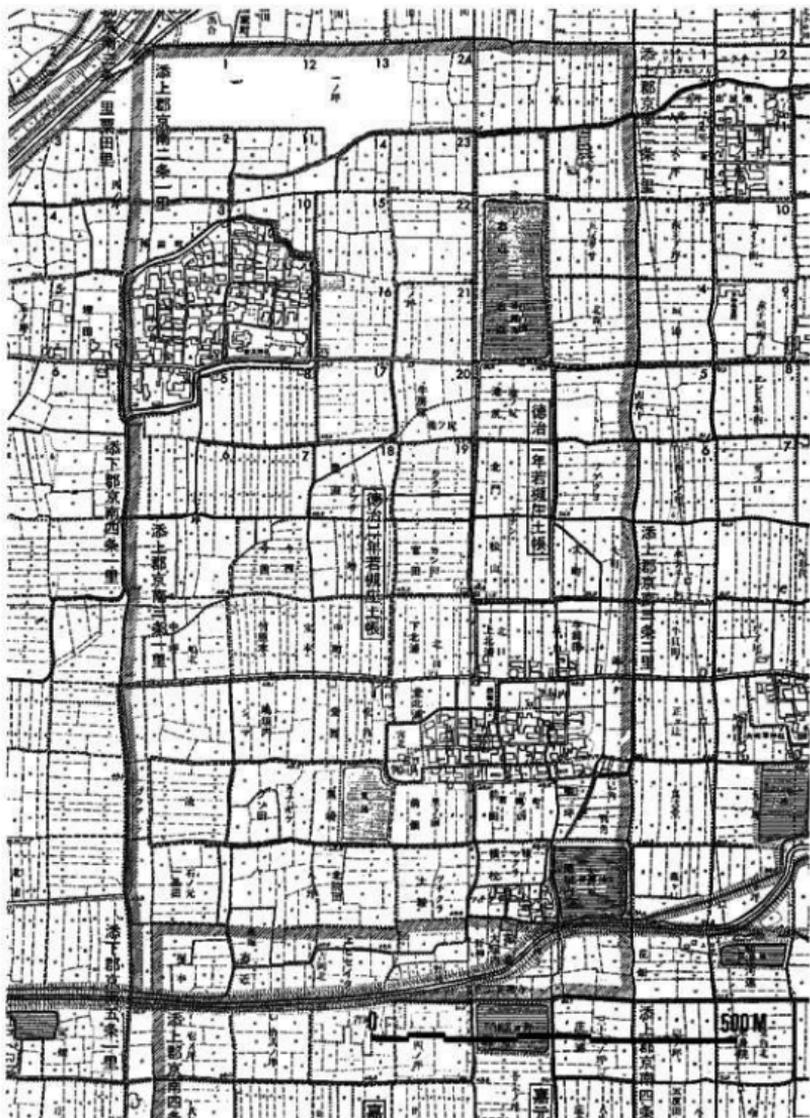


図4. 若槻庄の小子名分布図  
 奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条理復原図』No.33使用

次数	調査地	調査原因	調査機関	調査期間	調査概要
1	大和郡山市神田町・若槻町	宅地造成	奈良県立橿原考古学研究所	昭和55・9・10 昭和56・2・10	下ッ道東側溝 奈良時代の人工河川 と橋梁・祭祀遺物群
2	若槻町	大和郡山市立郡山東中学校建設工事	〃	昭和56・5・1 昭和56・7・15	中世の堀立柱建物 井戸
3	若槻町	宅地造成	〃	昭和56・7・20 昭和56・12・16	環濠をもつ中世の屋敷跡・井戸・土坑 奈良時代の人工河川
4	若槻町	〃	〃	昭和57・9・1 昭和58・1・14	縄文晩期の自然河道 中世系掘溝群
5	若槻町4-1・2・8番地	大和郡山市立、仮称「童の館」建設工事	大和郡山市教育委員会	昭和61・5・8 昭和61・5・31	若槻池堤体

表1 若槻庄関連遺跡調査一覧

接する地点をも重点的に把え、若槻庄関連調査を執行しなければならないのであろう。

ところで、若槻庄は条里坪並でいう派上郡京南二条一里十八・二十・二十六・三十坪、同三条一里二～三二坪を占めるが(図4)、北半部の二条一里城はすでに宅地と化しており、環濠集落のすぐ北側まで造成されている現況である。若槻庄の荘園景観も今やその南半部を残すのみである。その残る南半部にも県道大和郡山環状線が東西に貫通しており、また、下ッ道の位置にも市道番条高野線が整備されつつあり、概して至便の地である。周辺には神田環濠集落や番条環濠集落などの中世の遺構を今日によく伝える集落が残っており、こうした名だたる集落が集中するという歴史的空間を保全することが、若干機を失した感もあるものの、今後の開発行為に対応するための一つの課題であることは言うまでもない。

### III 調査

#### ① 遺跡の概要

若槻池は、昭和48年に農林水産省構造改善局の作成した「農業用水実態調査作業」に基づいて提出された調査表(昭和49年度大和郡山市溜池台帳)によると、総貯水量(有効貯水量)約40,000t、受益面積約110,000㎡、池床面積約20,000㎡の規模をもつ皿池である。今回の調査時には詳細な測量図が完成していたので、これを参考に現況をみておきたい(図6)。

池の北・東側は宅地に接し、東側にはコンクリート造三面張水路が設けられている。また、南堤体部は、神田町と美濃庄町を結ぶ幅員5mの東西道路として利用されているため、堤体の形状を良く



図5. 堤体の名部名称

留めるのは西側のみである。北・東側堤体も一応、堤頂部は遺存するものの後法面が全く遺存していない。西・北堤頂部の一部は畑として利用されているが、他の部分には雑草が繁茂していた。

さて、遺存状態のよい西堤体も規模は一定していない。南端では堤頂幅約5mであるが北端では約7mである。南半部は相当崩壊が進んでいるようである。堤標高は、南端で約50.6m、北側で約51.9mを測り、最高約1.3mの比高差がある。概して北半の堤体が安定した形態を保っている。また、北、東側の堤体も後法面が遺存しないが、西堤体北半部と同じ程度の規模をもっているよう観察される。

附属施設としては、樋門が三ヶ所にある。池の北東・南東・南西の各隅部に設けられているが、北東から取水し、南端から出水する仕組みである。南西の樋はその機能を失っていた。

池床は現在、二条一里二七・二八坪の2坪を占めているが、もともとは二六坪を加えた3坪域に及ぶものであったことが「徳治土帳」の記事から判明している。これは現況の約1.5倍の広さ<sup>⑪</sup>であり、相当な規模をもつ皿池であったことが知られている。いずれにせよ、条里坪並に添った典型的な四方堤池である。この種のいわゆる“大和の皿池”は、溜池灌漑網の発達した盆地内では数多く存在し、昭和28年の統計では約13,700基を数えている<sup>⑫</sup>。皿池の起源については、その多くが近世の構築にかかるものであるといわれているが、若槻池は史料からみてその成立年代が最も遡り得る皿池であり<sup>⑬</sup>、溜池灌漑の変遷や水利慣行を考える上で重要な位置を占めていると思われる。

なお、現在の名称は「若槻池」であるが徳治土帳では「右近」という地名が誌されている。喜多氏によれば、この「右近池(うつこ池)」が「おうこ」に転化し、古い池ということで「往古」の字があてられ「往古池」となったという<sup>⑭</sup>。さらに、行政区画の再編により「若槻池」と呼ばれるに至っている。また、地元では、南の新池(大将軍池)に対して、「北池」・「古池」とも称されている。本書では現名に従って記述したい。

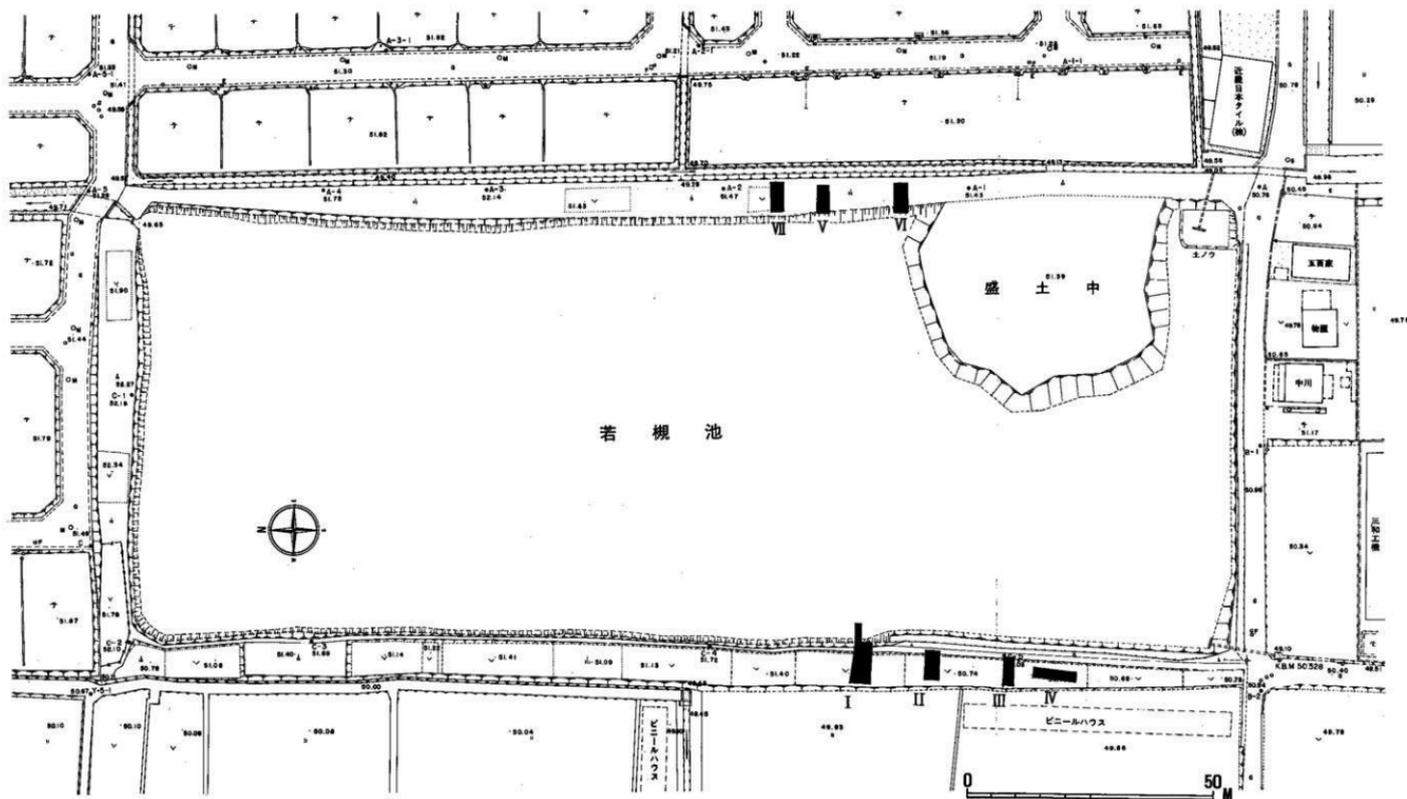


図 6. トレンチ配置図

## ② 遺構と遺物 (図6・7・8・9)

調査は、堤体に計7本のトレンチを設定して行ったが、用地の制約から堤体を完全に断ち切るトレンチは設定できなかった。以下、トレンチごとに報告する。

### 第Ⅰトレンチ

幅約4m、長約8mのトレンチである。土層断面にそって説明する。網目部分が築堤土であり、厚約1.1mを測る。黄灰粘質土層、茶色砂質土層、黄灰砂質土層、灰褐粘質土層等が積み上げられている。これらの層は、比較的硬く締った粘質土であり、いわゆる「綱土・刃金土」に相当する。綱土は、築堤土として多用される土である。版築状に積み上げた互層構造は認められないが、同一の土で叩き締めながら積み上げた様である。網目(粗)部分は、一時期降る築堤土であり、灰褐色砂質土、灰茶色砂質土が認められる。灰褐色系の砂質土であり、築堤土としては適切な土ではない。層内には土師器(古墳時代前期)の細片を含み、遺構内堆積土様の土層である。堤体の前法面を補強するために盛られたものであろう。地山は、乳白色の固形物質を含む青灰粘土層が主体を成す。盛土と地山の間には軟弱な自然堆積土は認められない。

### 第Ⅱトレンチ

幅約2.5m、長約5.5mのトレンチで、第Ⅰトレンチの南側に設定した。断面では堤の形状が表われていない。土層は第Ⅰトレンチと基本的に同じである。

### 第Ⅲトレンチ

第Ⅱトレンチ南側に設定した幅約2m、長約5.5mのトレンチである。地山が池床部に向かって大きく落ち込んでいる状況がある。盛土は第Ⅰ・Ⅱトレンチに共通し、堤が二時期に分かれている。

### 第Ⅳトレンチ

幅約2m、長約11mのトレンチで、堤長に併行して設定した。盛土の様相はⅠ-Ⅲトレンチに共通する。

### 第Ⅴトレンチ

東堤体に設定した幅約2m、長約5.5mのトレンチである。黄灰粘土層が築堤土の主体を成す。層中には少量の瓦片・瓦器椀片・土師器小皿片を含んでいる。第Ⅰ-Ⅲトレンチと同じく前法面に灰褐色系土で後修されている。

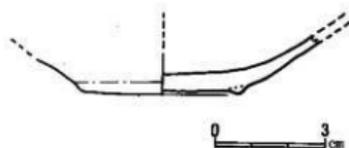


図7. 第Ⅴトレンチ出土遺物実測図

遺物については、出土量が微量であり、図示できるものは第Vトレンチの黄灰粘土層から出土した瓦器碗のみである(図9)。

底径4.3~4.7cmに間におさまる不整形でいびつな高台をもち、高台の貼り出しも低い。底部厚は約0.4cm、体部厚約0.25cmを測る。内面に暗文の痕跡がわずかに認められるが、その形状は判然としない。淡青灰色を呈する。この型式の瓦器碗は、川越編年<sup>⑧</sup>第Ⅲ段階A~C型式に比定できると思われる。その実年代は12世紀後半~13世紀後半頃である。他に第VIトレンチの黄灰粘土層から瓦器碗片・土師器小皿片が数点出土している。

#### 第VIトレンチ

幅約2.5m、長約5.5mのトレンチである。黄灰粘土を主体とする積土である。その層は池床部に向けて傾斜し、水平に積み上げたものではない。前法面の後補は他のトレンチと同様である。

#### 第VIIトレンチ

幅約2m、長約6mのトレンチ。地山は、青灰粘土層、暗青灰粘土層であり、黄灰粘土を主体に築堤を行う。この掘土内には、淡青灰褐色土、淡灰褐色土等の砂質系土層がブロック状に形成されている。東側が水路敷設の際に擾乱されている。

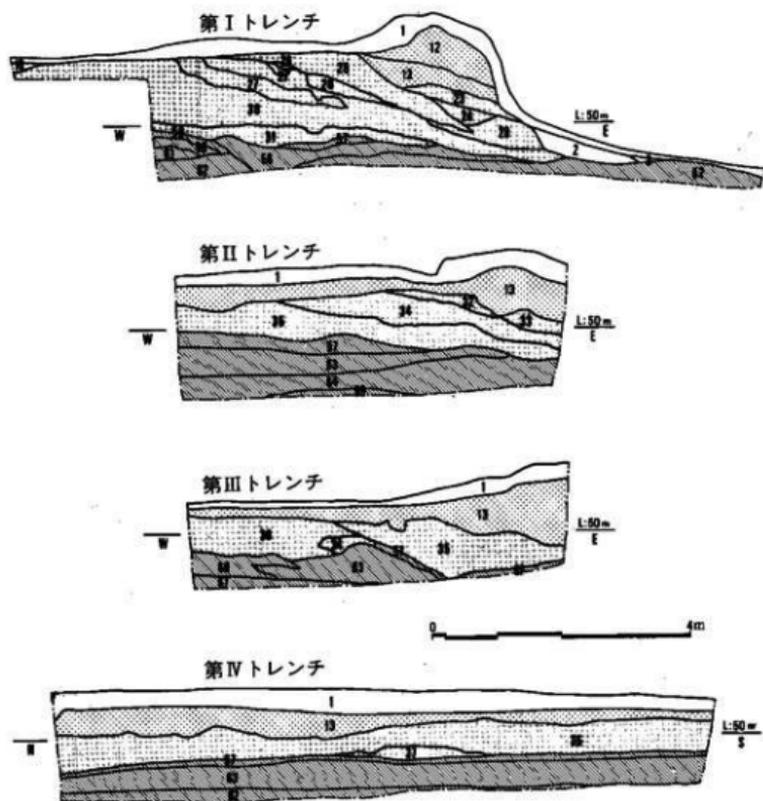


図8. 第I・II・III・IVトレンチ土層断面図

- |              |                |              |
|--------------|----------------|--------------|
| 1. 表土層       | 9. 暗褐色土層（盛土）   | 17. 暗灰褐粘質土層  |
| 2. 淡黄灰色粘土層   | 10. 淡茶色土層      | 18. 暗灰褐色土層   |
| 3. 茶色砂層      | 11. 黒褐色土層（攪乱層） | 19. 暗灰褐色砂質土層 |
| 4. 淡茶褐色粘土層   | 12. 灰褐色砂質土層    | 20. 暗褐色粘質土層  |
| 5. 灰褐色粘土層    | 13. 灰茶色砂質土層    | 21. 淡青灰色粘質土層 |
| 6. 暗灰色腐植土層   | 14. 淡褐色土層      | 22. 灰褐色土層    |
| 7. 淡灰色粘土層    | 15. 淡灰褐細砂層     |              |
| 8. 淡茶色砂層（盛土） | 16. 淡灰褐土層      |              |

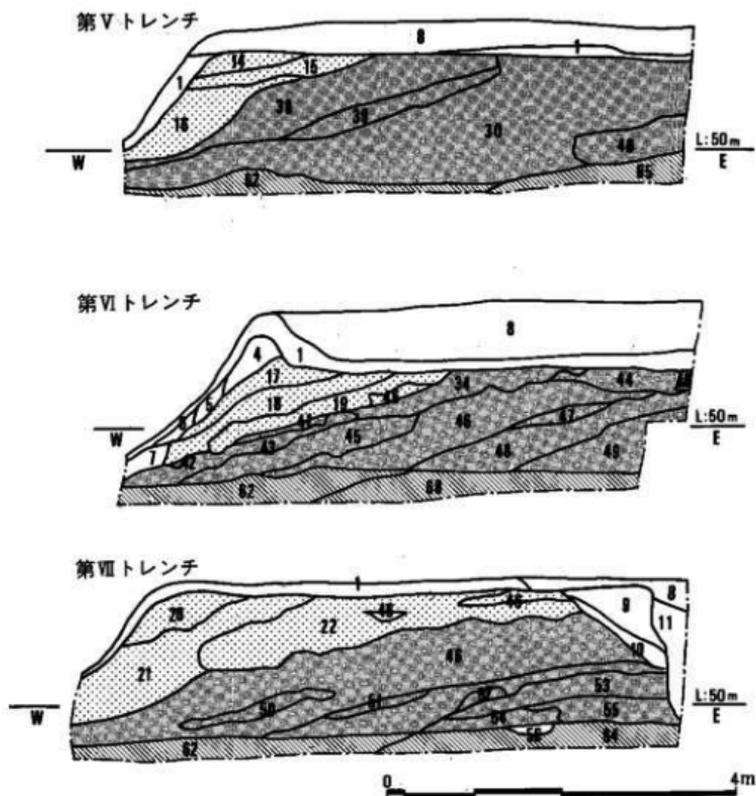


図9. 第V・VI・VIIトレンチ土層断面図

- |              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| 23. 青灰色砂質粘土層 | 31. 淡灰色粘土層   | 39. 黄灰色土層    |
| 24. 青灰褐色粘質土層 | 32. 淡茶色砂層    | 40. 灰褐色土層    |
| 25. 灰褐色粘質土層  | 33. 褐色砂質土層   | 41. 明茶黄色砂質土層 |
| 26. 灰茶色砂質土層  | 34. 淡灰褐色砂質土層 | 42. 茶色砂層     |
| 27. 茶色砂質土層   | 35. 淡黄灰粘質土層  | 43. 黄灰色砂質粘土層 |
| 28. 青灰色粘質土層  | 36. 灰褐色砂質土層  | 44. 明黄灰色     |
| 29. 黄灰色砂質土層  | 37. 淡灰色粘土層   | 45. 黄灰色粘質砂層  |
| 30. 黄灰色粘質土層  | 38. 黄灰褐色砂質土層 | 46. 黄灰色粘土層   |

- |              |              |               |
|--------------|--------------|---------------|
| 47. 暗灰褐色細砂層  | 55. 淡褐色砂質粘土層 | 63. 淡黃灰色粘土層   |
| 48. 淡黃灰色粘土層  | 56. 淡赤茶色砂層   | 64. 暗青灰色粘土層   |
| 49. 淡黃灰色粘質砂層 | 57. 淡灰色土層    | 65. 青灰色細砂層    |
| 50. 淡青灰褐色土層  | 58. 淡灰色粘土    | 66. 青灰茶色細砂層   |
| 51. 淡灰褐色土層   | 59. 淡灰色土層    | 67. 暗青灰色砂質粘土層 |
| 52. 淡灰褐色粘質砂層 | 60. 淡灰色粘土層   | 68. 暗青灰粘質砂層   |
| 53. 淡褐色砂質土層  | 61. 淡灰褐色粘土層  |               |
| 54. 淡赤茶色粘土層  | 62. 青灰色粘土層   |               |

#### IV 総括

まず堤体部の調査結果をまとめておきたい。

①堤体は、地山上に黄灰色粘土を積み上げることによって形成されている。その後、特に前法面を褐色系土で補強していることが全てのトレンチで認められた。したがって、堤は最低二時期に分けることができる（Ⅰ期・Ⅱ期）。

②第Ⅰ期堤（古段陸）の構築土は、いわゆる鋼土の特性をもち、比較的堅く積み締められている。水平に積み上げたというより、むしろ地床部に向って斜めに盛土を行ったことが断面観察によって知られ、その状況は第Ⅰ・Ⅵトレンチにおいて顕著に認められた。

③第Ⅱ期（新段陸）の堤は、第Ⅰ期堤上に茶褐色系土を積み上げて構築する。この土は、良質の鋼土ではない。第Ⅰトレンチでは古墳時代前期の土器片を含んでいた。

④地山と鋼土との間には、旧表土状の堆積や軟弱な土層は認められない。このことは、漏水防止等に關連して、脆弱な土層を取りはずした後で堤を構築していることを示している。

⑤Ⅰ・Ⅱ期の堤の構築時期を明確に示す資料は得ていないが、第Ⅴ・Ⅵトレンチの黄灰粘土層から出土した瓦器碗片が重要な意味をもつ。

等である。次に上記の諸点につき、若干の付言を示しておきたい。

①Ⅰ・Ⅱ期の堤にみられる形状の変化を模式的に示すと図10のようになる。つまり、当初は、前法面が緩やかに池床側に傾斜する形態であったものが、断面梯形の形態へ移行しているのである。ところで、Ⅱ期の堤に使われた土は築堤土としては適正でないように思われる。このことは、層中に土器片を包含するといった点や、調査時にはさして乾燥せずにバラバラと崩壊する状況をみても明らかであろう。第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅶトレンチでは堤頂部にも盛られているが、その量もさほど厚くはない。やはり、主として前法面の不足を補うことを目的としているようである。堤の笠置きのため形成されたとは思いますが、その積土が鋼土としては良好でないため、本格的な補修というよりも、多少便宜的な形成の要因を考えた方が適当かもしれない。たとえば、池凌えの際、池床部を若干掘り下げ、その排土の置場として形成されたとするのも一案であろう。

②一般に堤を築く際に用いる“鋼土”は、次のような特性をもっていなければならないとされている。



図10 堤体の形状変化模式図

- I 高い密度をあたえる粒度分布であり、かつ剪断強さが大で安定性があること。
- II 収縮比が小さく適当な塑性を有し、かつ水で飽和したときも軟化しないこと。
- III 有機物を含まず鉱物成分が不溶性であること。

等である。

今回、第I期堤構築土の土質検査や透水試験を実施しなかったため、上記の諸条件を必ずしもみとすものとは断定できないものの、ほぼ鋼土の特徴をもっているとしても大過ないものである。

さて、その盛土の方法であるが、池床に向けて斜めに積み上げていることが判明している。通常、水平に積み上げることが一般的であることを考えると、かなり異質な盛土の方法である。堤の構築の技術的側面を示すものであろう。

④今回検出した地山層について検討を行っておきたい。いわゆる地山層は、図11・12のようなレベルで検出されている。多くは青灰色の粘土層から成り、堤土との境界が必ずしも明瞭でないものもある。地山面と盛土との間には旧表土、あるいは、通常認められる自然堆積の包含層等は検出されていないので、おそらくは、こうした土層を取り除いた後で、堤の構築を行ったものと思われる。このことは、基礎地盤面が安定した岩盤ではないものの、積土と同質に近い粘土層を基礎地盤とすることにより、止水機能の向上を図ったものと思われる。

地山面、あるいは、周辺遺跡の遺構検出面のレベルを比較することによって周辺の微地形をある

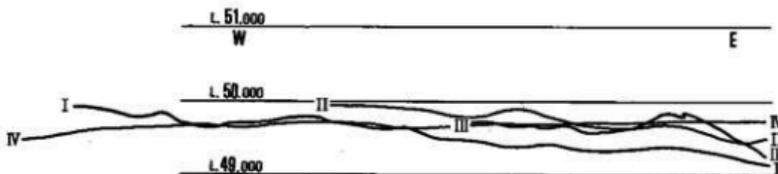


図11 西堤体トレンチ地山面比較図

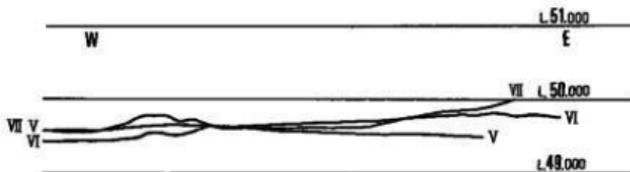


図12 東堤体トレンチ地山面比較図

程度推測することができる。(図-11・12)。この検討を行った金田章裕氏は、若槻池が東から西にはり出した台地状地形の端部に立地していると指摘している<sup>⑤</sup>。各レベルの比較は、堆積土層の流失や削平といったことも考慮した上で行われなければならないが、おそらく金田氏の指摘の通りであろう。桑里に規制された典型的皿池も功妙に微地形を取り入れ構築されているのであり、中でも微高地を選地するのが自然流下による出水を行う溜池により適しているわけである。また、こうした立地の特徴は、谷池の構造から典型的四方堤皿池への構造的推移を示すものとして捉えられている。

⑥第Ⅰ期堤の構築時期については、第Ⅴ・トレンチ出土の瓦器碗が目安となる。底部の破片であり細かい時期比定は困難であるが、川越編年Ⅲ段階前半期に該当する特徴をもち、おおむね12世紀後半～13世紀後半頃の年代を与えられる。この年代が堤の上限を示すものであるが、この時期が若槻池の成立に係わる時期であるだけに十分留意されてよい。この瓦器片が含まれる土層は、全トレンチにおいて認められるものであり、若槻池が成立当初から大きな改修を経ずに今日まで遺存してきたとすれば、この土器の示す年代をもって堤体の構築時期とみなすことができるとと思われる<sup>⑥</sup>。ただ、この場合四方堤皿池という構造は維持されても、堤体自体が大きな補修・改修を受けずに約800年間、成立当初から維持されてきたと単純に考えてよいのだろうか。

一般に堤体が崩壊する、あるいは、改修を必要とする要因には、図13のようなものが主にあげられる。すなわち、①漏水、②断面変形、③クラック及び陥没、④パイピング、⑤余裕高不足、⑥堤頂幅不足、である<sup>⑦</sup>。若槻池にもこうした崩壊の契機があったとしても堤体部をまったく新しいものに改修することなく現代まで遺存してきたのであろうか。いわば遺構のすり変えといった問題を考えなければならず、この点を考慮すれば、先の遺物は当初堤の成立時期を示すものではなく、あくまで現存堤の上限を画する年代の付与を行える資料であるというや慎重な結論を生むことになる。

ところで、文献では若槻池の改修等はあまり知られていない。水利慣行をぐる水論関係の文書は多いが、池川普請に関するものは少ない<sup>⑧</sup>。世襲制庄屋時代及び明治以後の共有文書を、明治24年に村民に分割保管させるという一事があったが、町有「永代帳」によるとこの内の第三号文書に池川関係の文書が多数存在したことが知られている<sup>⑨</sup>。現存はしないが、文献検索の必要性が痛感され、現存する堤体の成立時期に関しては、文献史料から知れる成果も十分援引しなければならず、従って、先のすこぶるひかえ目な時期比定を行うに留めておきたい。

ところで、日本書紀には多くの池を築造した記事があるが、実在したかどうか不明な点が多く、また現地比定も困難なものが多い。そうした中で、その沿革・構造等が比較的明らかであり、同時に大和の池の歴史を知る上で看過できないのが「益田池」であろう。益田池は、現在の橿原市見瀬町・鳥屋町辺に存在した平安時代の池沼である。高取川の水流をせき取めたもので、現在の橿原ニュータウンを水浸させるに足りる池床をもっていた。池床面積約405,000㎡、総貯水量約140万トンと推計され、「性霊集」等の史料から平安時代初期の築造にかかるものとされている<sup>⑩</sup>。構造的には一方堤の谷池であり、その北辺に遺存していた堤の発掘調査が史跡整備に伴い実施されている<sup>⑪</sup>。調

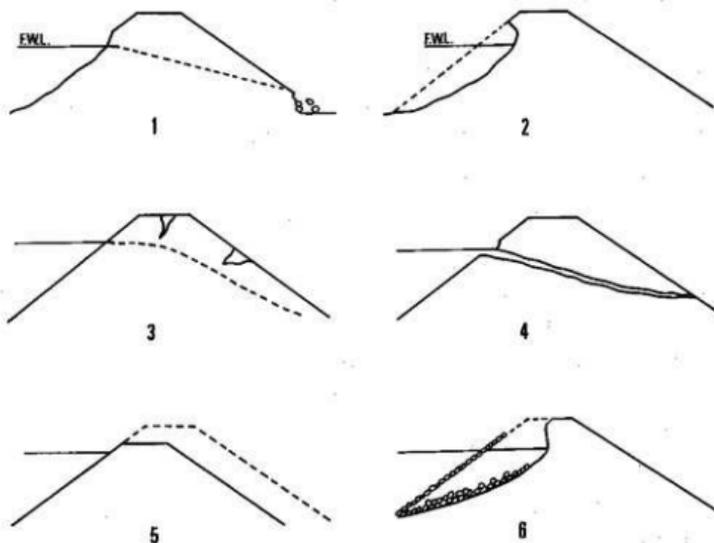


図13 堤体の崩壊要因

1. 漏水
2. 断面変形
3. クラック・陥没
4. パイピング
5. 余裕高不足
6. 堤頂幅不足

査の結果、版築状に積み上げて成形する構築の技法が堤体の断面観察から明らかにされ、また、その規模に関しても幅約36m以上、高さ約9.6mという推定値が得られている。若槻池と比較しても格段規模の大きい堤体であり、直載な比較検討は意味をなさないが、互層に積み上げる方法などは共通している。最も大きな違いは、池全体の構造である。益田池は、自然河川をせき取めることによって湛水する谷池であり、原則的には一方の堤を必要とする構造をもつ。若槻池は典型的な四方堤皿池であり、谷池から皿池への構造転換が平安時代に成されたことが推定できる。あるいは、香具山北東に存在した磐余池も米川の流路をせき取める谷池であったことを考えると、古代の池の形態は谷池的な構造をもつものが多かったであろう。

ただ、この場合、池の機能の問題を抜きにしては明確な構造的変遷は説明しにくい。その機能は、①灌漑、②養魚養禽、③観賞遊園、④遊水（洪水防止）等であり、一つの池が複数の機能をもつことが多いとしても、たとえば②は専ら副次的機能であり、③の平城宮東院、平城京左京三条二坊六坪、飛鳥京嶋宮勾池等<sup>⑩</sup>で代表される宮苑池は除くとして、皿池は灌漑用溜池であることに異論はないと思われるが、谷池には④の機能の比重もみのがせない。あるいは、低地にあって不整形な平面形をもつ池には、遊水池の機能が十分想定されてよいと考える。したがって、谷池から皿池への構造変

化は一本化して行われたのではなく、その主たる機能によって併行して築造されたのであろう。これは、皿池の機能が本来補助的な水利を確保するためのものであり、若槻池がその水源を広大寺池に迎いでいたことが知られているように、皿池と皿池が連結する形で水量を確保していたのである。皿池と皿池、あるいは皿池と谷池が連動して灌漑網を形成していることもあり得るわけで、その意味では、両形態の池の立地の違いもさることながら、相互に連動して初めて補助的水利網を形成する共存形態を採るものであり、谷池→皿池という一面の変遷には留意すべき点があろう。いずれにせよ、益田池や磐余池は、その平面形は不整形で、山麓部の谷間に造成された一方堤池である。小河川の水流を直接せき止めることによって湛水する池であり、現在のダムと原則的に同じ構造をもつ。おそらく古代においてはこうした谷池的構造をもつ池が主流であり、“大和の皿池”と称される四方堤池の成立は、若槻池の出現を契機として、やがて近世期に爆発的增加を成し得るのである。この皿池成立の技術的水準はすでに益田池や磐余池を築造した段階に用意されていたものであり、こうした一定の技術的達成を背景に、盆地床への条理制地割の全面的敷行という水田経営単位の再編成に伴う用水源の確保を直接的契機として成立してきたのであろう。

こうして水田の経営に不可欠な養水供給源としての溜池も、現代に至って徐々にその機能を失っていくのである。若槻庄内には、他に2基の池がある。里池と大将軍池である。里池は三条一里十六坪、大将軍池は三条一里三二坪を占める面積約10,000㎡の池である。里池は明治28年（1895年）、大将軍池は寛政11年（1799年）に築造されたことが史料から判明している。庄園成立当初は存在しなかった池であるが、江戸期における水田経営の効率化にそって新たに築造されたものであり、ここに当初からとは異った水利慣行を生む結果となる。やがて近現代における水路網の整備や吉野川分水の引水によって、かつて庄田の養水を担った池の機能も徐々に低下する。若槻池の機能喪失も大規模な宅地造成を直接的契機とするものであり、その後連鎖的に周辺の開発が進んだ。失われた庄園空間は、再び蘇ることはない。

- 註① 足利健亮「下ッ道の拡がりとうつろい」（『環境文化』40号）1979
- ② 中井一夫・伊藤勇輔「神田・若槻遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1980年度）1982
- ③ 市道番条高野線拡幅工事に伴い、昭和59年度に市教委が調査を実施した。詳細は未報告である。
- ④ 神田集落の環濠改修に伴い、昭和58年度に市教委が調査を実施した。詳細は未報告である。
- ⑤ 中井一夫「神田遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1977年度）1977
- ⑥ 註②
- ⑦ 泉武「若槻遺跡第2次発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度）1983
- ⑧ 中井一夫「若槻遺跡第3次発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度）1983
- ⑨ 中井一夫「若槻遺跡第4次発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）1983
- ⑩ 奈良国立文化財研究所「大和国荘園の復元的研究」1982
- ⑪ 柳澤文庫専門委員会編「大和郡山市史」1966 なお、現存条里地割との関係をみれば、坪境を堤体後法面下端に設定して築造していることが指摘できる。
- ⑫ 堀井甚一郎「奈良県地誌」1962
- ⑬ 金田章裕「平安期の大和盆地における条里地割内部の土地利用」（『史林』61巻第3号）1978
- ⑭ 喜多芝之「大和國若槻庄史料」補遺
- ⑮ 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』）1983
- ⑯ 本書でいう地山は洪積層を意味しない。寡少な調査経験から察した無遺物層を指す。
- ⑰ 土を盛り足すことをいう。なお、堤底幅を根敷（ねじき）、堤頂幅を馬踏（ばふみ）といった用語で説明する場合もあるが、本書では使用しない。
- ⑱ 池床部の底渡えを行う場合、「二尺掘」と称する場合がある（『大和國若槻庄史料』第2巻所収第32号文書等）。文字通り解釈すれば池床の不要堆積物を除去するわけであるが、ヘドロ様の堆積物の廃棄は当然としても、さらに下部の掘り下げが付随して行われた場合、その土を堤上に盛ることが考えられる。今回の場合、古墳時代前期の土器片が混っていたが、東接する第④次調査地点で検出されている約60基の古墳前期～中期前半の土坑群の存在から考えて、この若槻池の一帯にもこの時期の遺構が及んでいたと推測される。
- ⑲ 農林水産省構造改善局防災課編「老朽ため池整備便覧」昭和57年度版 1982
- ⑳ 金田章裕 前掲書
- ㉑ 池沼の築造年代の考古学的検討は、池床部で検出される遺構の層属時期をもって築造期の上限とする方法がとられるが、池床部は常にオープンな状態にあるので、厳密には上限を画定する資料にはなり得ない。むしろ、堤下部での遺構、あるいは築堤土に含まれる遺物の年代で上限を設定する方がより妥当である。この意味で、今回の調査はきわめて重要な資料を提供したといえる。
- ㉒ 註⑨ 前掲書
- ㉓ 喜多芳之・波辺澄夫「大和國若槻庄史料」第1～4巻 1973～1976

- ㊸ 喜多方之『大和國若槻庄史料』補遺 1978
- ㊹ 末永雅雄『池の文化』1947
- ㊺ 大串石蔵「大和州益田池の史的研究」(『農業土木研究』第22巻5号)1954  
泉森校「益田池の考古学的調査」(『橿原市千塚資料館報』1)1979
- ㊻ 伊藤勇輔『沼山古墳・益田池城』(『奈良県文化財調査報告書』第48集)1985
- ㊼ 和田翠「磐余地方の歴史的研究」(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第28冊「磐余池ノ内古墳群」)  
1973
- ㊽ 『奈良国立文化財研究所年報1980』1980
- ㊾ 奈良国立文化財研究所編『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』1986
- ㊿ 『仏教芸術』109号
- ㊽㊾ 註㊽ 前掲書
- ㊽㊿ 喜多方之 前掲書



(a) 池床部全景 (南西から)



(b) 池床部細景 (南から)



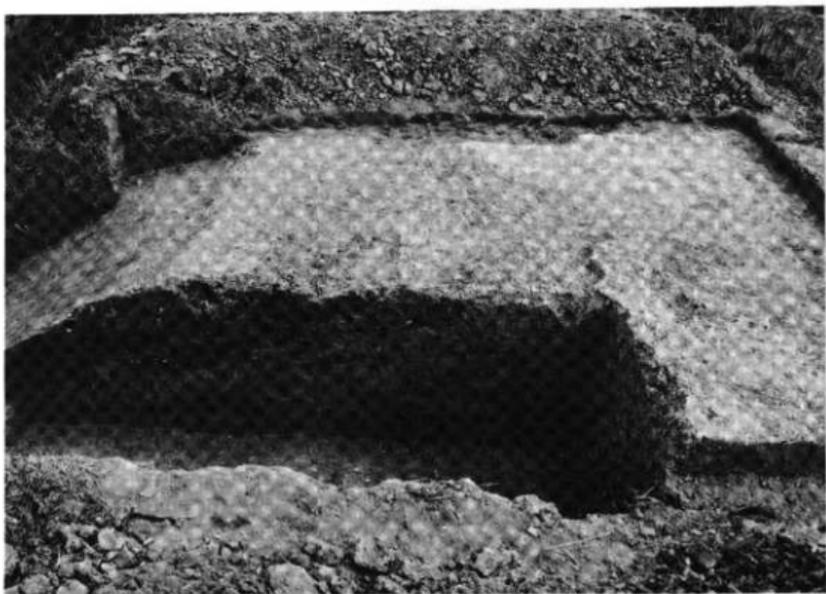
(a) 西側堤体部全景(南から)



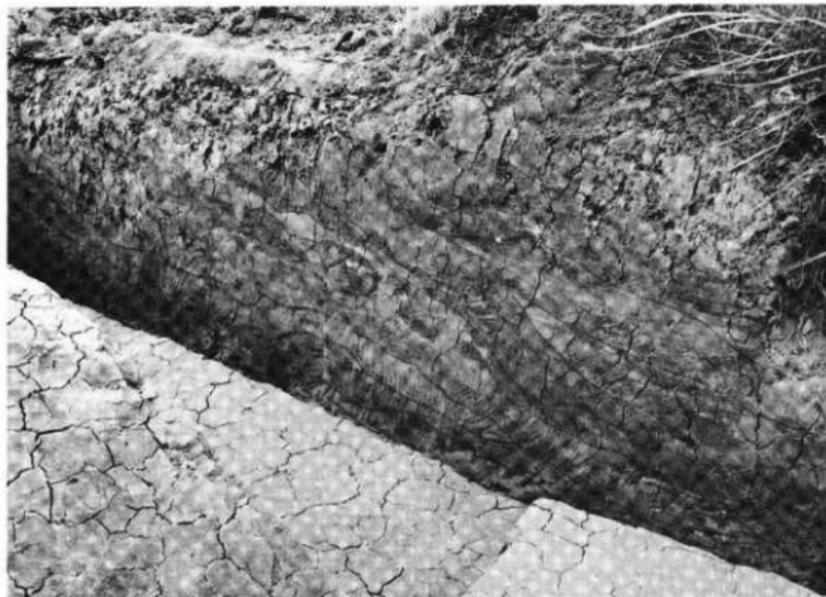
(b) 東側堤体部全景(南から)



(a) 調査風景



(b) 第Iトレンチ全景(北から)



(a) 第Iトレンチ土層堆積状況 (南東から)



(b) 第Iトレンチ (北から)



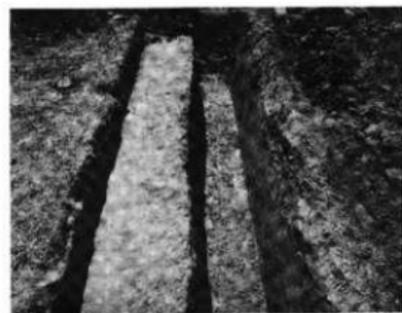
(c) 第Iトレンチ (南東から)



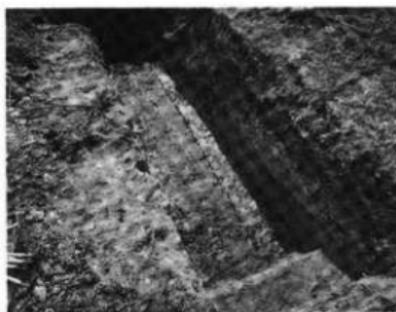
(a) 第Ⅱトレンチ (西から)



(d) 第Ⅴトレンチ (東から)



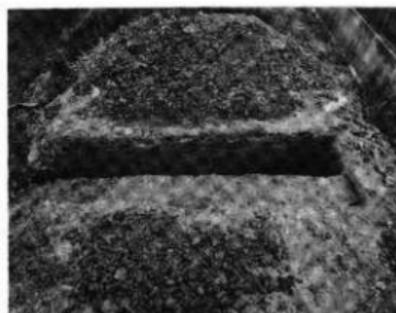
(b) 第Ⅲトレンチ (西から)



(e) 第Ⅵトレンチ (南東から)



(c) 第Ⅳトレンチ (南から)

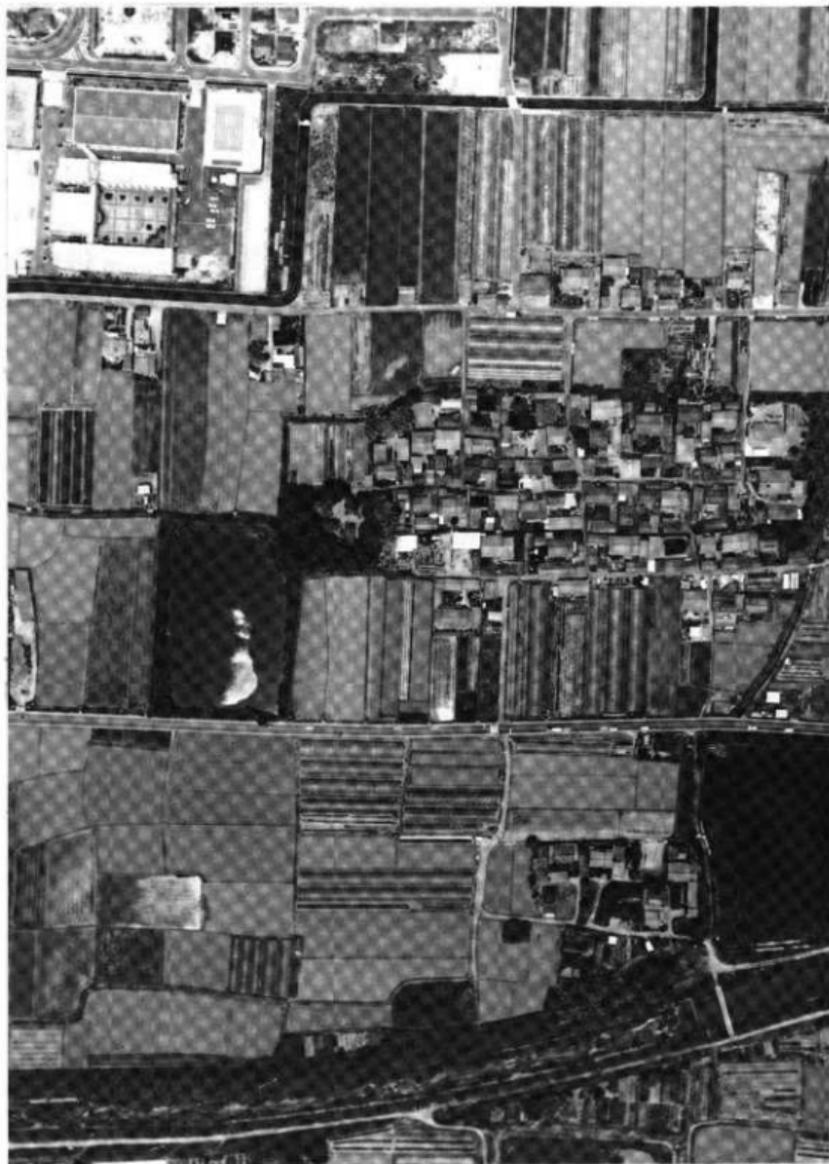


(f) 第Ⅶトレンチ (南から)



若槻池航空写真（真上から）  
盛土搬入後、昭和61年6月13日撮影





若槻環濠集落の現状航空写真（真上から）  
昭和61年6月13日撮影





番条環濠集落の現状航空写真（真上から）  
昭和61年6月13日撮影





神田環濠集落の現状航空写真（真上から）  
昭和61年6月13日撮影

---

大和郡山市文化財調査概要5

若槻池発掘調査報告書

昭和62年3月31日

編集  
発行 大和郡山市教育委員会  
大和郡山市北郡山町248-4

印刷 有限会社 金井平版印刷  
大和郡山市北西町227

---